九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Debateの擁護

井上，奈良彦
筑波大学大学院生（原著出版時）

https://hdl.handle.net/2324/4772329

出版情報：英語教育. 33 (9), pp.80-81, 1984-11. 大修館
バージョン：
権利関係：

●投稿●

Debate の擁護

井上奈良彦

序

英語でスピーチ・コミュニケーション活動（oral interpretation, drama, public speaking, discussion, debate 等）が最も盛んなのは，主として E.S.S. と呼ばれる課外活動団体である。適切な指導者が得にくいこともあって問題もあるが，正規の英語教育には欠けることが多い運用能力の練習を相当数の学生・生徒が自主的に行っていることは注目に値いする。中でも debate は特に大学生の間で非常に熱心な活動の対象となっている。

ところで，本誌6月号で羽鳥博愛氏は debate（おそらく高等学校の）活動に対してかなり批判的見解を示しておられる。[1] 小生は大学 E.S.S. を初めとして8年間 debate 活動（実際の討論・学生の指導・試験の審査）に関係し，その価値を体験した者として少し debate の弁護を試みてみたい。

debate とは何か

羽鳥氏は discussion を勧められるところで，

> あまりむずかしい，種々の資料などを調べなくてはならないような議論は英語の話す力を伸ばすためには不適当である。もっと身近なことについて気軽に話し合うほうがむしろよいのである。(p. 17)

として debate を批判しておられる。しかし，debate はむずかしい内容について資料を調べないとできないということはない。スピーチ・コミュニケーションでは意思決定のモデルとしての debate は，論題に賛成・反対の双方が自分の立場を主張し第三者にその判断を委ねるものとされる。[2] 辞書の定義の一つには，"a regulated discussion of a proposition between two matched sides" (*Webster's New Collegiate Dictionary*, 1980) とある。高校の E.S.S. で英語の訓練に用いる debate ならば，決められた論題について，公平なルールに従って，賛成側・反対側が自分の立場を主張し，相手の立場に反論するゲーム，と考えればよい。参加者の英語力に応じて論題は，「制服の廃止」でも「中森明菜の方が松田聖子よりすばらしい」でもかまわない。資料は日頃の経験やまわりの人の話などであって，必ずしも文献調査をする必要はない。

debate は E.S.S. の活動にふさわしい

羽鳥氏の批判にはもっともなところもあり，debate の実践上考慮しなければならない問題点もたしかにある。

> ……コンテストに出ようなどということを考えると，一般に話題がかなり高度でむずかしいために，その準備には日本語で考え，和英辞典を引き引き，およそ会話体とはいえないような英文原稿を作り上げて，それを一生懸命に暗記したりする。(p. 15)

「会話体」でなくともコンテストという公式の場にふさわしい文体なら良いが，「和英辞典を引き引き」では英語として通じない文ができてしまう。「暗記」にのみ頼っていては debate の価値は大いに減ってしまう。話題のむずかしさを含めこういった問題を，今後 E.S.S. はその目的に照らして考えていかなければならない。

ここでは，羽鳥氏の「英語を話す力をつけるための集まりである」という E.S.S. の目的を受け入れたとして，debate は本来その活動の要件にかなったものであることを示したい。

(1) 内容

氏はまず，「しゃべるためには内容がなくてはならない」と言われる。debate では，いろいろな話題について賛否両論を考えることから自分の見逃していた意見に気づき，また今まで英語で話したことのない話題について練習することができ，内容のある話の練習に最適である。

(2) 即時性

次いで氏は，「しゃべるというのは即時的なものである」として，「debating contest に備えて，いろいろ原稿を作り，それをなかば読むような話し合いというのは，実はこっけいである。」と E.S.S. の debate を批判しておられる。これだけに終わらず，何度も試合をして準備したアウトラインだけでしゃべれるようになり，さらに即席で話せるようになれば，成果はあったことになる。実際の会話が即時的なものであるからといって，その練習も常に即時的でなければならないということはないであろう。また，debate では，相手の議論に応じた反論をするには原稿を読むだけではできないし，cross-examination のやりとりも考えると，debate は十分即時的（impromptu, extemporaneous）な要素を持っている。

(3) systematic practice

最後に氏は基礎的練習の必要を強調されるが，debate に必要な技能も基礎的練習によって強化されるのはもちろんであるし，たとえ debate を中心とした活動を考えても「段階を考えた合理的練習」が可能である。refutation の練習として，相手の発言を否定し理由をつけ

1) 羽鳥博愛「E. S. S. 指導の留意点」本誌 1984, 6月号, pp. 15-18.

2) Douglas Ehninger and Wayne Brockriede, *Decision by Debate*, 2nd ed. (New York: Harper & Row, 1978), p. 7.

てみるのもよい。短いスピーチを聞いて質問をするのは cross-examination の練習になる。

以上のように debate は適切に用いるならば E.S.S. の練習として効果的である。さらにもう少し広く英語の運用能力の練習に debate が適していることを示してみたい。

debate といわゆる四技能

debateによって，聞く・話す・読む・書くというすべての技能を練習することができる。まず，debate は口頭で行われるわけだから，orthodox style（cross-examination のない形式）ですべて用意した原稿を読むという極端なことをしなければ，相手の議論を聞きとってそれについて口頭で質問したり反論するといった，聞く・話すの訓練となる。要点をメモしたり，聴衆（審査員）を説得するために限られた時間内に効果的に話す練習もできる。

読むことも，資料に英文のものを用いれば訓練されるし，限られた時間で必要な情報を読み取る練習にもなる。論題について賛否（もしくは一方のみ）が書かれた記事を読んで議論の出発点とするのでもよい。[3]

書くことは，原稿の準備段階で訓練される。和文英訳ではなく，論理的に組み立てられた文章を書くことは，教室ではあまり行われないが，非常に大切な技能である。

心理的要素など

今までの経験から英語を話す訓練として debate が秀れていると思われる点を少し挙げてみたい。

(1) ルールが決まっている

自由な話し合いというのはやさしそうだが，自信のない者には話すきっかけがとらえられず最後まで黙ったままということになりかねない。いかに話に加わっていくかも練習する必要があるが，話すこと自体の練習を考えると，debate であれば話す時間は必ず与えられるし，自信がなくともチームのためにと話す努力をすることになる。初めは原稿に頼ってでも何かしゃべったという自信になり，徐々に臆せず話せるようになるわけである。

(2) role-play

教育的訓練としての debate（academic debate）では賛否両論を自分の個人的意見に関係なく述べるわけで，その論の擁護者の役割を演じていることになる。そうすることで，「こんなことを言うのは恥ずかしい」，「皆に笑われるのではないか」といった不安が和らぎ，積極的にしゃべることができる。人前で話をするのが苦手な人が自信のない外国語でしゃべる場合には，こうした心理的なことも大きな利点である。[4]

(3) ゲームとしての面白さ

debate は一種の知的ゲームであり，試合で勝ち負けがあるところからスポーツの試合に似た魅力がある。これは外国語学習を楽しいものとし，試合のために練習の苦労にも耐えられることになる。資料調べに使っているエネルギーを技能の練習に向ければさらに英語の力がつくであろう。英語の訓練を主とする E.S.S. の中のdebate では，判定において引用した資料の優劣ではなく debater の主張・反論の優劣を重視するのはもちろんのこと，議論の組み立て方，効果的な話し方といったことを十分に考慮しなければならない。

結　び

今まで述べてきたことから，E.S.S. の活動として debate は決して悪いものではなく，むしろ活用されるべきものであるとわかっていただけたと思う。スピーチ・コミュニケーション活動の中でも oral interpretation, public speaking, drama については英語教育の中で時々論じられているが，debate や discussion についてはほとんど取り上げられていない。[5] 本誌などでもこの方面の議論が深まることを願って拙稿を終わらせていただく。

（筑波大学教育研究科大学院生
元金蘭千里高等・中学校教諭）

3）賛成論の文章と賛否両論の要点を示したテキストもある。L.G.Alexander, *For and Against* (London: Longman, 1968).

4）role-play の有効性については，例えば，Susan L. Stern, "Drama in Second Language Learning from a Psycholinguistic Perspective," *Language Learning*, 30, No. 1 (1980), 80.

5）スピーチ・コミュニケーション活動全般にわたって日本の英語教育に有効であることを理論的に示しているのは，James R. Bowers, "A Rational for the Use of Speech Communication Activities in the Teaching of English as a Foreign Language," *Speech Education*, 10 (1980), 1-14.